

☆年間第3主日(1月24日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (ヨナの預言 3章 1-5, 10節)

主の言葉が再びヨナに臨んだ。

「さあ、大いなる都ニネベに行って、わたしがお前に語る言葉を告げよ。」

ヨナは主の命令どおり、直ちにニネベに行った。

ニネベは非常に大きな都で、一回りするのにも三日かかった。

ヨナはまず都に入り、一日分の距離を歩きながら叫び、そして言った。

「あと四十日すれば、ニネベの都は滅びる。」

すると、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者も低い者も身に粗布をまとった。

神は彼らの業、彼らが悪の道を離れたことを御覧になり、思い直され、宣告した災いをくださのをやめられた。

第二朗読 (使徒パウロのコリントの教会への手紙 7章29-31節)

兄弟たち、わたしはこう言いたい。定められた時は迫っています。

今からは、妻のある人はない人のように、泣く人は泣かない人のように、

喜ぶ人は喜ばない人のように、物を買う人は持たない人のように、

世の事にかかわっている人は、かかわりのない人のようにすべきです。

この世の有様は過ぎ去るからです。

福音朗読 (マルコによる福音書 1章 14-20節)

ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、時は満ち、神の国は近づいた。「悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。

二人はすぐに網を捨てて従った。また、少し進んで、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、すぐに彼らをお呼びになった。この二人も父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行った。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

寒い朝になりました。ところどころでは雪になっているそうですね。少しお湿りになって私たちの体にはいいのかもしれませんが、それにしても新型コロナウイルスの感染症の勢いが止まりません。どうぞ十分に気をつけていただき、健やかに過ごしてください。ミサに来られなくてもこの聖書朗読のコメントをお読みいただき黙想していただきながら、ロザリオの祈りを唱えるなどしてお過ごされれば、神様もきっとわかってくださるでしょう。今はコロナに罹れば入院もできないくらいですから、本当に気をつけましょう。

さて今日の主日は「神のことばの主日」とも言われています。フランシスコ教皇様が2019年にお決めになりました。またこの日は「キリスト教一致祈禱週間」にもあたります。同じ神様の言葉を信じている私たちが一刻も早く、一緒に主イエスを礼拝する日が来ますように祈りましょう。

第一朗読（ヨナの預言 3章 1-5, 10節）

預言者は「神のことば」を伝える人です。しかしその言葉の多くは当時の人々に辛いことを告げる言葉であること、例えば今日のヨナ預言者が「あと40日すればニネベの都は滅びる」と告げたような、人々にとっては聞きたくない言葉だったのです。ですから人々から迫害されることもあったので、ヨナ自身もはじめはニネベに行くことを拒んだりしたのです。しかしその言葉を告げることがニネベの人たちにとって救いとなることを理解したヨナは決然と出かけていくのです。そして、ニネベの人たちは回心を現わし救われるのです。このように「神のことば」は奇跡を起こす言葉でもあるのです。「神のことば」の内に秘められた「父なる神の思い」を黙想してみましょう。

第二朗読（使徒パウロのコリントの教会への手紙 7章29-31節）

初代教会においてキリストの再臨の時は間近に迫っていると考えられていたようです。ですからパウロは「この世のありさまは過ぎ去る」として、それに過度に執着しないように勧めています。現代では「キリストの再臨」はまだ先だと考えている人が多いようですが、今は物事が私たちの心を多く占めているのではないのでしょうか。情報が多すぎて私たちの心がついていけないのです。うまく対応している人たちも実は多くの人たちが疲れているのです。「神のことば」が入り込める余地がなくなっています。もう一度「神のことば」が私たちの心をいやすために入れる場所を空けておきましょう。心の断捨離をしましょう。

福音朗読（マルコによる福音書 1章 14-20節）

イエスはガリラヤ湖畔から宣教活動を始められます。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と。イエスは宣教活動を始められるまで30年余の年月を要されました。それは人々との生活を十分に経験され、人々に神の言葉を告げるには何が必要で、どのようにするのが大事なのかを黙想する時間が必要だったのでしょうか。そして、いよいよその時が来たのです。「時は満ち」という表現はまさにそのことを現わしています。そして弟子たちを集められます。弟子たちを集められた目的は、他の福音書の言葉によれば「共に生活するため」「宣教活動に遣わすため」と言われています。イエスの言葉の本当の意味を理解してもらうには共に生活することが大事でした。つまりイエスの言葉は空論ではなく、実生活に密着した教えであったからです。イエスのたとえ話を聞けばよくわかります。そしてまた、選ばれた人たちは貧しいながらも一生懸命働いていた人たちでした。実直で重要な働き手であった人たちでした。働き手を失った家族はその後どうなったのでしょうか。福音書にはどこにもそれについての話はありません。きっとイエスはそのことに関しても十分に対応していかれたのではないかと思います。「主イエス」に仕えることは大事であるがゆえに、この世では「30倍、60倍、100倍の実り」を得られたのではないのでしょうか。神に従うということはそういうことなのですね。



P.S

先に書きましたように、今はコロナに感染すると、入院することすら難しくなっています。ですから決して無理をなさらず、「STAY HOME」しましょう。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光